

地域と連携した教育課程の充実

～職業学科を設置する知的障がい特別支援学校高等部普通科のインターンシップ～

北海道札幌あいの里高等支援学校 学級数 25 (校長 伊藤 友紀)

□ 実践の概要

普通科は、「総合的な探究の時間」を中心とした教育課程を編成しており、「職業や自己の進路に関する課題の探究」に重点を置いている。探究のサイクルの過程で、地域の様々な職場でインターンシップを行い、自己理解や課題解決と共に、地域の一員としての自己の生き方や在り方を深く考えられるよう取り組んでいる。

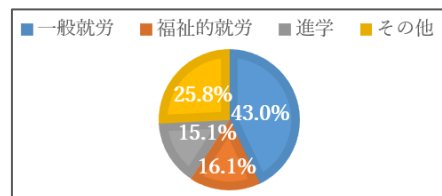
1 実践の目的

本校普通科の「総合的な探究の時間」を中心とした教育課程に基づき、自立と社会参加に向けた3年間の進路指導や、地域の資源を活用した教育活動を展開することを目的とした。

2 実践内容

(1) 実施計画

- ① 生徒アンケート～入学の理由、進路の希望など
- ② インターンシップの指導計画の作成～ねらい、時期の整理
- ③ 評価表の作成及び実施方法の検討



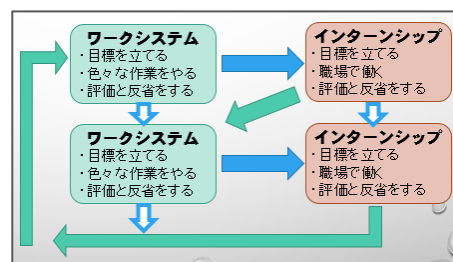
【普通科4～8期生 卒業後の進路希望】

(2) 取組の具体

- ① 普通科4期生から8期生、計98名にアンケートを行った。入学の理由は「教科等の学び直し」、「作業学習とは違う学習へのニーズ」及び「コミュニケーション力や思考力を身に付けたい」等であった。また、卒業後の希望は、上記グラフのとおり、多様な進路希望が見られると共に「わからない、決まっていない」等の回答も4分の1となり、高等部段階で進路を模索していくことが重要であることが考えられる。
- ② 就業体験及び「総合的な探究の時間」の3年間の指導計画を基に、インターンシップが効果的な時期を検討し、3年間通じた計画を作成した。ねらいを「社会や業種を知る」「自分の適性を把握する」「目標を明確に体験し、課題改善につなげる」と設定し、生徒の進路選択や将来の希望にアプローチできるようにした。
- ③ 本校生徒の実態やニーズを踏まえて「育成を目指す資質・能力の三つの柱」に迫るため、評価表を作成した。職業自立や社会自立が間近である高等部段階の生徒であることから、経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」、社会への対応力につながる「非認知能力」を根拠とした。
- ④ インターンシップについて、教職員と生徒が共に地域の一員として活動すること、生徒の取組を正しく評価することを重視し、教職員が引率で行うこととした。また、校内で行う軽作業「ワークシステム」を20種類程度用意し、インターンシップと組み合わせることで、校内外で課題解決への取組ができる仕組みを整えた。

評価項目	評価内容	評価	
考え抜く力	理解力	・求められていることの意味・内容・仕組みを正しく理解する力	
	課題発見力	・状況を理解し、目的や改善点を考える力	
前向きに力を出す力	主体性	・自分から進んで取り組み、自分の役割にベストをつくす力	
	実行力	・仕事の目標を設定し、確実に行動する力	
チームで働く力	社会性	・職場に適したコミュニケーションをとる力 ・社会や職場のルールやマナー、人との約束を守る力	
	精神面	・根気よく取り組む力 ・ストレスを感じる状況や環境を理解し、コントロールする力	

【インターンシップ評価表（一部抜粋）】



【校内外の学習の仕組み】

(3) 取組後の点検・評価、工夫改善

生徒や教職員、実習先各々が評価しやすいよう、行動評価の内容を添付資料として作成した。更に、職業学科と同一に行ってきた産業現場等の実習は「長期インターンシップ」に名称を改め、普通科の教育課程との一元化を図った。

(4) 改善後の取組

実施計画や実施方法、評価表等について、普通科所属の職員及び進路指導部と共通理解を図った。更に、学校全体で普通科の教育課程と実践について理解を深めるため、職員研修を行った。

3 実践のポイント

- ・地域で実習を活発に行うことで、地域で本校の教育活動が認知され、学習活動の拡大を図ることができた。
- ・資質・能力を具現化した評価表は、就業体験に留まらず普通科の教育課程全般で活用することができた。評価を蓄積することで、生徒が過去と現在を比較し、自己の成長に気付き、自己の課題を明確に認識して学習に取り組む主体性が育まれた。
- ・本実践を通して、作業学習を中心に教育課程を編成している職業学科と、総合的な探究の時間を中心に教育課程を編成している本校普通科との学ぶ方法の違いを明確にすることができた。